

令和6年度第1回三豊市総合教育会議の開催結果概要

【日 時】 令和7年2月12日（水）13時30分～14時55分

【場 所】 三豊市危機管理センター3階 302会議室

【出席者】

(1) 構成員

職名		氏名
市長		山下 昭史
教育委員会	教育長	大原 一仁
	委員	野田 雄一郎
	委員	永田 洋子
	委員	須山 貴司
	委員	金山 郁子

(2) 事務局

職名			氏名
政策部	地域戦略課	課長	荒脇 健司
		課長補佐	山岡 且典
		主任	三録 里美
教育委員会事務局	部長		開口 陽子
	教育総務課	課長	森 正憲
	学校教育課	課長	内田 さなえ
	学校給食課	課長	十鳥 武志
	生涯学習課	課長	真鍋 裕亮
	スポーツ振興課	課長	高橋 秀行

【傍聴者】 なし

【会議次第】 1 開会

2 市長挨拶

3 教育長挨拶

4 協議事項

(1) 学校での教育内容の充実について

(2) 放課後改革について

(3) その他

5 閉会

【議事要旨】

発言者	内容
進行	それでは、これより令和6年度第1回総合教育会議を開催いたします。なお、本日の会議は地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第6項により公開することとなっております。 まず、はじめに三豊市長 山下 昭史よりご挨拶申し上げます。
山下市長	改めましてこんにちは。常日頃、皆様方におかれましては教育行政におきまして様々なご支援とご理解ご協力を賜っておりますことをこの場をお借りいたしましてお礼申し上げます。本日は、令和6年度第1回総合教育会議ということで、寒い中お集まりいただきありがとうございます。我々としては、昨年度策定した教育大綱において、基本理念として「夢にチャレンジ」を掲げ、いろいろな挑戦を応援していこうとしており、少子化の影響もあって子どもたちの選択肢が少なくなっている状況の中、子どもたちがやりたいことにチャレンジできる環境を整えていきたい、選択肢を増やしていきたいということで取り組ませていただいております。そういった意味で、今後、総合教育会議も含め、どうすれば子どもたちが夢にチャレンジする環境を作れるか、皆様の意見を頂戴しながら進めてまいりたいと思っておりますので、本日は忌憚のないご意見を賜りますよう、よろしくお願いいたします。
進行	続きまして、三豊市教育委員会教育長 大原 一仁よりご挨拶をお願いします。
大原教育長	皆さんこんにちは。教育委員の方とは定例の会議や訪問等で教育について話し合う機会がございますが、本日は総合教育会議ということで、市長はじめ地域戦略課の職員の方にもお話を聞いていただき、またご意見をいただき多様な視点から考えていきたいと思っています。教育委員会事務局には5つの課がありますが、それぞれの課が施策の推進において非常に困難を抱えていると感じます。市長からもありましたが、遠慮なく、忌憚のないご意見をいただいて、私たちが少しでも効率よく、前向きにいろいろな施策に取り組んでいけるようご協力をお願いしたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
進行	ありがとうございました。協議事項に入る前に、本日の会議の議長の選任をお願いしたいと思います。 この会議の議長は、会議の内容によって決めることになっております。市長、どのようにいたしましょうか。

山下市長	教育長にお願いして、会議を進行していただけたらと思いますが、いかがでしょうか。
大原教育長	分かりました。では、私の方で議長を務めさせていただきます。
進行	それでは、今回の議長に教育長が選任されましたので、これよりの議事進行については、教育長よりお願いいたします。
大原教育長	議長に選任されましたので、ここからの議事については私が進行させていただきます。それでは、会議次第に沿って議事を進行してまいります。協議事項の1番「学校での教育内容の充実について」の協議になります。まず教育委員会事務局より説明をお願いします。
学校教育課 内田課長	資料に基づき説明（略）
大原教育長	ありがとうございました。 それでは、教育委員会事務局からの説明が終わりましたが、本議題について市長のお考えはいかがでしょう。
山下市長	最後に説明のあったバカロレア教育は、モデル的に詫間小学校と詫間中学校で取り組んでいます。基本的には、候補校というのがあって、その後認定校となります。今は関心校です。段階があり、カリキュラムなどが、ある程度バカロレア教育の水準に達しないと候補校や認定校になれません。なぜ取り組んでいるかという、学校教育という公教育が岐路に立っていると思うからです。個別最適化という言葉が当たり前のように使われていますが、今の授業スタイルで、教員数も含めて、個別最適化ができるのかが私の中で疑問です。今までのやり方は、小、中学校をあがって高校に行く、高校に行くためには診断テストを受け、5教科、内申点がどうかという話になりますが、そのやり方で、果たして5教科の点数が平均的に良ければいいのかと。今の子どもたちは、生まれたときからスマートフォンがあって、自分たちでいろいろな情報を取捨選択できますが、一方で危険なのは、自分の好みに合った情報だけが相手側から与えられることで、偏向した考えになる可能性があることです。それをきちんと教えられる環境が果たして今の学校教育にあるのかというのを考えていまして。もっと広い分野の中での教育、学びを作らなければならないのかなと。自分たちで判断でき、自分たちが情報の海の中から真に必要なものだけを拾い上げる力、これが生きる力であって、子どもたちは世界中の情報の中から自分が生き残っていくための力を付けな

	ればいけないという状況になっています。そのためには自分の頭で考え自分で行動し、失敗してもいいから、そこで学んでいくというまさに探究が主流になってこないといけないと思っています。進学に関してもそうです。一流大学に行くというのが良いのかもしれませんが、そういう尺度で生きていく時代は終わっています。数学だけで世界の寵児になる可能性もあります。松山英樹、大谷翔平、藤井聡太が、我々の時代に何度も何度も有名選手が挑戦して繰り返し跳ね返された壁をいとも簡単に越えてきたのは、何が違うのかと考えたときに、彼らはこの道で生きることを覚悟したとき、自分で学び、自分で体得してきたものがベースにあるのかなと思います。それは今までの学校教育で生まれたものなのか、彼の周りの環境がそれを許して覚悟を決めてやったからなのか、我々は公教育を考え直さないといけないのかなと思います。
大原教育長	ありがとうございました。 それでは教育委員の皆さまのご意見をお願いします。
須山委員	市長のおっしゃる通り、いわゆる環境が整ってそれに上手く乗っていったって成功していく人が世界に通用する人になると私は思います。そこを小学校低学年の子どもたちにどこで判断してもらうのが課題と思っています。個々のレベルによって判断力も違うし、携わっている先生方の環境にもよると思います。先生方は大変な仕事をされており、人材も減ってきて教育委員会の方々も大変だと思います。その中で手法として学校の統合も1つの手段でしょうが、優秀な先生方に支えてもらいながら、子どもたちが成長していけるように、自分だけの力では判断できないところをできるように、大きい気持ちで支えてくれる先生を活用していただきたらと思います。これは大変な難問だと思います。
永田委員	今年で教育委員の任期の4年目になり、学校訪問をさせていただくと、今年度、特に先生たちによる授業改善が進み、アクティブラーニングや、子どもたちが主体の授業展開をされています。私自身がのめり込んでしまうような、楽しい、面白い、ワクワクドキドキする、後々どうなったんだろうと気になるような授業、3つの資質能力を重視し、子どもの生きる力を養い、5年後、10年後には子どもたちが自分で考えて判断して挑戦できる力を養えるような授業を行っています。同時に就学前教育についても、幼児期には子どもは無自覚にいろいろなことを学んでおり、3つの資質能力の基礎を大切にした教育が行われています。今は子どもたちの考える力、失敗経験、いろいろなものを通して、すぐに答えを出すのではなく、1か月後に答えが出るといったような環境を整える保育に変わってきています。子どもたちはみんな小

	学校へ行くので、育ちの根っこの部分を大切にした保育の改善も行っています。これからも引き続き幼児教育からの小学校への接続や、校区での連携を進めていただきたいと思います。学びというものは生まれてからずっと続くと思っていますので、小・中学校はもちろん幼児教育の方も教育委員会で訪問してくださっていますが、引き続きよろしくをお願いしたいと思います。
山下市長	国際バカロレア教育は就学前と小中高校までの一連の流れがあって初めて成立するものです。バカロレア認定校で学んだ子は海外の大学への受験資格を得られます。一貫した教育は就学前からスタートします。実際に高松に候補校を目指している幼稚園があり、三豊市の小学校、中学校と連携しようとしており、あとは高校をどうするかというところです。まさに3つの資質能力を重視しています。
金山委員	先ほど市長がおっしゃっていました国際バカロレア教育というのは初めて聞く言葉でした。説明をしていただいて、大変興味があります。私には中学1年生の子どもがいて、現在詫間小学校、詫間中学校がモデル校にということですが、認定校になるのは何年後を目標にしているのか、後々、市内全域の学校に予定されているのかをお聞きしたいです。
大原教育長	何年というモデルが示されている訳ではありません。ただ通常の手順を踏めば、まず関心校というのになって登録します。これには1年くらいかかります。次に候補校になって1年、認定校になって1年間と、最低3年間はかかります。ただ公立で三豊市と同じ立場のところで行くと、実際に申請して関心校になってからは3年間だったかもしれませんが、その前に2年くらいはいろいろな調査をしています。高知県の香美市では5年くらいはかかっています。
金山委員	長い期間がかかるんですね。
山下市長	認定校になるのがベストですが、候補校、関心校になった頃から、カリキュラムは変わっています。認定校になればカリキュラムをスタートしてはいけないわけではなく、条件が揃って人的なものが水準に達すれば関心校から候補校になって、候補校から認定校になるという、段々レベルが上がっていくような形です。詫間小学校も今年度中には候補校の申請を出します。本当は一斉にやりたかったのですがそこは教育委員会も大変なので、とりあえずモデル校を作りましょうと。

大原教育長	一番の問題は、今までやったことのないことなので、それに取り組むとなると、教員の理解、人材が必要になることです。他県のある市が市内小・中学校全部一斉に始めましたが、聞いたところによると、そんなに上手くいっていません。人材を揃えるとなると、人事権は県の教育委員会が持っているので、県が相当バックアップしてくれないと、なかなかできないと思います。正直なところ、仮に全校が認定を目指すとなると、そんなに簡単にはいかないと思います。
山下市長	かなりハードルは高いですが、探究学習として国際バカロレア教育は世界基準で、それがたまたま文部科学省の指導要領と重なるところがあったので、全く乖離するものであれば厳しかったのですが、子どもたちにとっても世界観も違いますし、やってみるのが良いと考えました。
野田委員	今お話しされている通りだと思います。昔から、指導要領の変遷はありますが、探究型の学習こそ資質能力を高めるということが言われていました。指導の個別最適化は子どもにとって価値がある学習になるということは理解できるし、資質・能力をそれで伸ばすこともできます。しかし先ほど教育長がおっしゃったように課題もある。指導の個別化をするには、教員が余りに限定的すぎる、そうでなくても今年度の小学校、中学校の現場では人手が不足している状況なので、それに加えてもっと個別最適な学びをするには教員が必要になる。そこをどのように打開していったら良いかは、お金にも配置にも絡んでくる大きな問題ですが、実現すれば更に学習の成果も進んでいくと思います。2つ目は教員の研修をどういう風にしていくかです。探究学習を重視していくにあたり、一斉学習から抜けきれない教員がいるとしたら、どうやって研修していくかが課題です。学校訪問をしても一斉学習から抜け切れないが、抜け出ようと努力している先生がたくさんいるので、市の研修として教員研修をどうやって充実していくかが大事ではないかと思います。3つ目は、自ら探究していくためには何が必要か考えたときに、基になる基礎基本の定着という土台が必要です。何も土台がないところから、課題を見つめたり、それをどういう手立てで解決していくかというところにまで手が届かないので、基礎基本の定着との両輪がなければ、この教育理念は実現しにくい。しかし別の見方をすると、学校教育課の説明にあったように、学習指導過程を改善していこうとする先生の意識が大きくなればなるほど、両輪が機能していく可能性があると思っています。4つ目は、学校での学びを家庭での学びにどうつないでいくか。地域での学びももちろん大事ですが、家庭での学びと学校での学びの歯車が上手く噛み合うように展開、指導していく必要があると思っています。学校訪問の際に、子どもがタブレットを家に持ち帰っていろいろ調べたり、勉強したことを成果として書いて、それを学

大原教育長	校に持ち込んで、それを活かして学習している所もあると伺いました。家庭を学校が巻き込んでいくという活動を大事にしていけないと令和の授業改革にはつながらないのではないかと思います。 今おっしゃったことは私もつくづく思っています。校長をしている時、学校の授業を変えていくというのは学習指導要領が変わっているにもかかわらず、ものすごく難しいこととっていました。旧態依然とした授業をしている先生もいれば、永田委員がおっしゃったような引き込まれる授業をしている先生もいますが、組織全体として変わっていくのは至難の業とっていました。国際バカロレア教育の研究は、組織として授業を探究型に変えていくために有効な手段だと思いました。校長先生方と香美市に視察に行ったときに、これができれば探究型の学習に変えられると共通認識を持ったのですが、じゃあそれをどうしていくかということになると、いろいろなアドバイスを受けてたり研修を受けてたりしなくてはならないといけないという結論に落ち着きました。認定校になっているのが、有名で優秀な子どもばかりが集まっている学校なので、「バカロレアってエリート教育ですか」と誤解した質問をされるのですが、全く逆で、こういう風でなければいけないというのはなく、その地域や学校に応じた形で作り上げることができます。それがしんどいところでもあります、そういう意味では組織としても授業を変えていくのには一つの有効な手段でないかなと思っています。また全体に広げるとなったときに、他県のある市のように一斉に始めるというより、どこかの学校がモデル校として認定を受けてからそのノウハウを広げていく、その中で認定を受ける方がずっと効率的、現実的だと思っています。野田委員がおっしゃっていた基礎基本の確立も特に小中学校では大切で、基礎をしっかりやっていくということが前提になっていると思います。バカロレア教育を導入したからといって、そちらが疎かになることはありません。カリキュラム作成の負担が大きいのですが、民間企業等からアドバイスを貰いながらできるだけ先生方の負担を軽減しながらやっていこうと思っています。
野田委員	教育大綱の中の主要施策に、子どもたちの能力を最大限伸ばすことができる支援体制の構築を図ることを明記しています。市としてそれを明記したということは、特別教育支援員を増やすという意味合いだけでなく、個別最適な学びを保障するための人材確保に、市としても取り組んでいけないと先細りになる可能性があります。
山下市長	乱暴な言い方かもしれないのですが、従来型の〇〇小学校、〇〇中学校が本当に必要なのかなと思うのです。個別最適な授業をやるからといって、県が教員を10人20人増やしてくれるかというと、まずあり得ません。それなら

	ば、専門的な教育ができる先生がいるならそこに子どもたちが集まればいいのではないか。例えば AI について教えられる先生は未来永劫出てこない、それだったら外部の専門家を呼んで教えてもらえばよいということになると、従来型の学校という枠は何のためになるのか。この後の議題である部活動の地域移行もそうなのですが、子どもたちの選択肢を増やしていく、能力を伸ばしていくためには、枠を超えたもの、社会とも直接つながっていくことも重要でないかと思っています。
大原教育長	次の学習指導要領の素案作りが始まっているのですが、その柱となるのは、今まで国が画一的に下ろしていたものを、地域や学校の裁量を増やしていくというものです。市長がおっしゃったように学校と地域の縛りが緩やかになって、それぞれの学校や地域が考えていろいろなことができるような方向になっていると聞いています。 それでは時間がまいりましたので、次の議題に移りたいと思います。続いては協議事項 2「放課後改革について」です。協議事項 1 と同じように、教育委員会事務局より説明をお願いします。
スポーツ振興課 高橋課長 学校教育課 内田課長	資料に基づき説明(略)
大原教育長	ありがとうございました。それでは、まず市長のお考えをお聞きしたいと思います。
山下市長	前からお話しさせていただいている内容で、教育内容の充実と関連しているのですが、我々の感覚だと部活動には思い出もありますが、そこはノスタルジーの世界であって、現実問題として子どもたちは、部活動においてやりたいことができていません。スポーツ少年団のサッカーで活躍する子でも自分が進む中学校にサッカー部がないということがあり、そういうのは正しい姿なのだろうかと。部活動というものを学校の中の教育に囚われすぎて、子どもたちの目線で考えられているのだろうかと思います。例えば野球だったら大谷翔平 2 世みたいな子が三豊にいるかもしれないのに、彼が進む中学校に野球部がなかったら、本人はやりたいと思っても、野球ができない、それでよいのかと思います。いろんなチャレンジをしたいと思って、例えばメタバースを勉強したいと思っても大学に行くまで我慢かな、という世界はおかしい。体験格差が問題になっており、同じ 14 歳の大都市圏の子どもとの経験と三豊市の子どもとの経験に余りにも差が開きすぎています。そういうのをできるだけ無くし、選ぶのは子どもたちですが、選択肢を我々が用意し、子ども

	たちが選んで、失敗してもいいし、挫折してもいいし、ただ、やり切った感や体験を将来に生かしてほしい。そのためには、どうしたって選択肢がないと無理と思っています。部活動の地域移行は文部科学省含め政府の方針でやっていますが、それは目線が教員の働き方改革が主になっています。三豊市に関しては子どもたちの目線で放課後改革を行っています。
大原教育長	それでは委員の皆さまからご意見をいただきたいと思います。
須山委員	基盤を作っていただいて、子どもたちのやりたいことに取り組める体制ができるのは非常に良いこと。実証事業の中で地域移行の課題として気になったのは、指導者によって指導の方法や目標が変わってくるため、果たして子どもや父兄の望む指導者になれるかということです。特にソフトテニスなどを見ると、困りごとが出てきているのが良く分かります。ソフトテニスは団体戦もありますが個人的な競技に近いので、ペアとなった人とどこまで伸びていけるか、指導者の裁量というか、指導能力にもよるが、ある程度目標が大事ななど。同じ種類の部活動が選べても、それぞれ個人によって目標が違うと思うので、協議というか調整を十分にやってもらいたいと思います。またどうしても活動場所に行くまでの交通手段の経費、部活動の経費がかかっているの、市としてのある程度の助成をしていただけたらと思っています。
大原教育長	ミクスポでは指導者に研修会をしていましたよね。例えばソフトテニスであれば何人か指導者がいますが、ベーシックな部分については揃えなければいけないと思っており、指導者に対する指導は行っております。ただ指導者をいかに確保するかは非常に難しい問題であり、これをクリアすることができれば課題解決が前進するのは間違いないと思います。 1月の末に野球の実証事業の見学に行きましたが、南北に分かれて2チームで時間制の、全員が出られるような形式で3試合行っていました。1チーム20数人ずつの2チームで構成されていました。2年前、校長として開会式に行ったときに驚いたのは、開会式で並んでいても生徒がびっくりするくらい少ないことでした。9人揃っているチームが11校中数校しかない。試合になったら合同チームにしますが、監督と生徒が1人くらいいるだけでベンチはガラ空き、プレイしている子は一所懸命声を出しているのですが、ベンチは静まり返っている状況でした。2つに分けてやっていると、そこがものすごく活気づいている。監督の先生は中学校の顧問も多かったのですが、個性のある方がいらっしゃり、その辺りは全然違う。 移動方法の検討や保護者の負担もあるが、これからはこういう風な姿になっていくのかなと感じました。

山下市長	面白いのは、ソフトテニスにしても、課題を結構書かれています、部活動だとこんな話は出てこない。しょうがないと思っているからです。だけどこれは、逆に言うと良いことで、親御さん含め本人たちが求めているのはそういうことなのだと分かって、すごくいい例。指導者のレベル、勝つためだけではなく、指導としてのレベルも上がってきます。経費、移動については、先ほど説明で PwC が出てきたと思うのですが、企業版ふるさと納税やいろいろなふるさと納税を集めてファンドを作りたいと思っています。ファンドの 5% の運用益を子どもたちにスタディクーポンとして移動の経費の助成などで還元することを考えています。子どもによって格差が生まれないようにはしようと考えており、移動にもいろいろな形があると思っていますが、mobi とか、いわゆるサブスクで、月 6,000 円払ったら学校から部活、部活から家への移動ができるようにしたいと考えています。
野田委員	私も実際の地域移行は大賛成。どうしてかと言えば、他校の子と必然的に交流ができるのが一番の魅力と思っています。普段、小さい頃から馴染んでいる子以外の子と、同じ競技を通して仲間になれる。先ほどの学習でいえば協働的な学び、お互いに切磋琢磨しやすいということが、良い意味で、子どもの心の育ちに良い影響を与えるだろうと、大賛成です。課題は、先ほど須山委員がおっしゃっていた、安全な移動をどういう風に保障するか、今後中学校も学校再編に向かうのではないかと思われるので、そことの関連性をどういう風に上手く図っていくか、見通しを持たなければいけないと思っています。先般、東かがわ市の部活動の地域移行について、お話を聞いて勉強する機会がありましたが、学校をどんどん少なくして再編を進め、地域クラブに移行しています。そこで一番気になったのは、(東かがわ市は)山が多い地形であり、夕方何時まで活動しているか、それによっては真っ暗な中自転車で帰らないといけない生徒さんもいる。三豊市はそこまではないですが、生徒が通る道路の安全性をいかに保障するか、照明やガードレールや歩道などの整備もこれから先で考えなければならない。なかなか移動手段がない家庭もたくさんあるので、考えていく必要があるのかなと。
金山委員	個人的な話になるのですが、子どもが中学生で吹奏楽をやっていて、平日部活動、土日に地域移行のクラブに参加させていただき、1 年間終えて、とても楽しかったと言っています。何が楽しかったかというと、大人数で合奏できたこと、先生が、中学校の顧問の先生、高校の先生、退職された音楽の先生など、毎回違う先生が来て指導して、とても勉強になったということです。私自身、吹奏楽は全く未知の世界だったのですが、地域移行によって、地域の子どもたちとの交流もできるし、指導していただくことで技術力も向上するというのは、いち母親として三豊市でこういう事業をしていただいて

	とても良かったし、これからもぜひお願いしたいと思っています。一つ思っていたのは、吹奏楽の活動場所が高瀬中学校で、私は送迎ができたのですが、他の部員の子で、本人は行きたくても保護者の送迎ができないから参加できないという子がいたそうです。できれば一緒に乗せていってあげればよかったのですが、道中、交通事故があった場合に責任をどうすればよいかという問題があったので、送迎してあげられないまま1年が終わってしまいました。先ほども皆さんおっしゃっていましたが、送迎の問題を、地域移行を考える上で検討していただけたら、もう少し希望する子たちが増えるのではないかと思います。ご検討の方、よろしくお願いします。
山下市長	突拍子もない話になりますが、この間まで、詫間で自動運転バスが実証運行していました。部活動の地域移行に送迎バスを出すとすると、バスの運転手さんがいないのです。三豊市の公共交通機関がコミュニティバスしかないのですが、公共交通機関を行政が補完しようとする、最大のコストが人件費になります。バスを動かすための経費のほとんどがドライバーの給料など人件費になり、これは行政として持たない。自動運転というのは、一つの選択肢として、行けなかった子もこのバスさえ乗ってくれたら高瀬中学校まで時間関係なく行き帰りができる、そういうことも含めた自動運転への挑戦であります。おっしゃるとおり送迎ができる子とできない子の差を作りにたくない。だからそこにまた経費がかかるために受益者負担をいただくとしたら、先ほど言ったようにクーポンを使って補助を行いたいと考えます。
大原教育長	他にはいかがでしょうか。
永田委員	以前、県教育委員会から、働き方改革というか、クラブ活動の地域移行についての冊子が出ていたと思うのですが、それは教員が子どもたちと向き合う時間の確保を主題にして作られていました。市長のお話を聞いて、三豊市としては子どもにとっての地域移行を全面に押し出していて、なるほどなと。体験格差の是正というか、いろいろな環境を整備するのを進めている過渡期だと思うので、保護者や地域の理解を得るのは難しいと思うのですが、様々な問題解決に向けて取り組まれていることに、これからも期待したいと思います。
大原教育長	他はよろしいでしょうか。 それでは次に、本日協議した内容以外に何か協議したい事項についてございましたら、ご提案いただきたいと思います。
野田委員	先日、教育委員会でも話題提供させていただいたのですが、小中学生の視力

	の低下が著しく、学校教育課で調べていただいたいいくつかのデータがあります。視力 1.0 未満のお子さんの割合が、小学生で 4 割、中学生で 7 割くらい。その原因はたくさんあると思いますが、2 年間の学校訪問を通じて感じたことは、書く姿勢がものすごく悪い。なぜかという鉛筆が正しく持てないのです。握りこんで書いたり、変な持ち方がすごく多い。訪問を始めて各教室の何割が正しく鉛筆を持てているかを私なりに数えてみたら、20 人から 30 人のクラスで、ひどい時はきちんと持てているのが 2 人、平均 5 人から 6 人です。タブレット、ゲーム、テレビ、本を読む等の他の原因もあると思いますが、書く姿勢が悪いということは、目線距離を意識していないので、どんどん近視になっていくと思います。直す一つの方法として、小さな器具がありますよね。あれを使うと指の当たる位置が決まっているので、ずいぶん鉛筆の先が見えやすくなって、書きやすくなる。すると段々、姿勢が戻ってくるので、それ以上(視力低下が)進行しない可能性がある。中学生はシャープペンシルを使うので仕方がないのですが、小学生にはぜひ 1 人 1 個ぐらいは器具を持たせて、トレーニングを 1 学期間だけでもいいからやらせてもらいたいなど。それで(器具を)外したときにどういう風な状況になるかデータを集めて、翌年度の視力の進行度合いと比べてみたら成果が出てくるのではないかと思います。
山下市長	鉛筆の持ち方っていうのは教えないのですよね。
野田委員	教えるんです。だけど永田委員曰く、幼児教育のレベルから鉛筆を変に持って、癖になって書いているので、家ではほとんど親は言わない。そういうちょっとしたものでもトレーニングを日常から常時経験させていくと、無意識に持てるようになるのではないか。
山下市長	そんなに視力が落ちているのですか。
野田委員	落ちています。器具は 1 個数百円程度のものなのですが、小学生全員となると相当な金額になる。だけど、三豊市の子どもの健康管理から考えたら決して高くはないように思う、というような話を教育委員会で提案したのです。
大原教育長	実際、県の保健体育課からも、視力の急速な低下、年々近視になっている率が高まっていると聞いています。もちろんタブレットやスマホの影響もあると思いますが、今は確かに鉛筆の持ち方について重きを置いていない、教員もそうですが、家庭ではなおさら。何らかの対策を打ってほしい、とは言われています。野田委員がおっしゃったのも一つの方法かと思いますので検討

進行	させていただきます。 熱心にご討議いただきましてありがとうございます。それでは、すべての議題が終了しましたので、これからの進行を事務局にお返しします。
山下市長	皆さまお疲れさまでした。それでは、閉会に移らせていただきます。閉会に際して山下市長より一言ご挨拶をお願いいたします。
進行	本日は長時間に渡りありがとうございました。本当に皆さんの意見は的確だなあと思っておりますし、我々もいただいたご意見を参考にさせていただいて、三豊の子どもたちに夢にチャレンジしてもらえよう環境を作りたいと思いますので、今後ともぜひよろしくお願いできたらと思います。本日はありがとうございました。 ありがとうございます。 以上をもちまして、令和6年度第1回三豊市総合教育会議を終了させていただきます。長時間に渡りご協議いただきありがとうございました。

三豊市総合教育会議規程第6条第3項の規定により、ここに署名する。

令和7年 3月 28日

三豊市長 山下 昭史

三豊市教育長 大原 一仁